

とたんギャラリーのダイニングデスク 第五回 <b>ライブのものさし</b>	日	2007年12月15日(土)
	時	16:30~18:00
	場	とたんギャラリー(阿佐ヶ谷)

パネリスト	阿部仁、戌井昭人、古今亭駒次、大川幸恵
質問者	
ギジロク作成者	土田愛

議事内容	注釈
------	----

【「見る側」から「やる側」へのきっかけ】

ある種、無形のものを扱うというのが3人の共通点だが、そのような「パフォーマー」、見る側からやる側へと移ったきっかけとは？(大川)

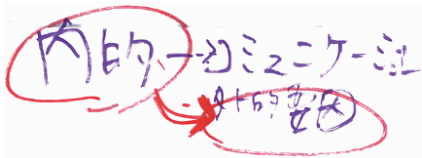
→ジャック・ニコルソン※1への憧れもあるが、もともと小学生の頃から台本を書いたりしていた。家でふざけて父親が踊っているのを真似たりして「やる」快樂を知った。(戌井)

→大学1年のときに新宿の末広亭※2に行き、TVには出ていない落語家たちがこんなにも面白いのかとびっくりした。自分でもできるかもしれないと思い、出演していた古今亭志ん駒※3 師匠に弟子入りした。(古今亭)

→「観る側」から「パフォーマー(やる側)」にいったわけではなくて最初から「作る」というのがあってそこからパフォーマンスへいった。作るという作業と人前で演奏するという行為は別物で最初のうちは人前での演奏に抵抗があった(阿部)

→最初から「作る」ありきで「見せる」こととは分かれているということ？(大川)

→分かれているしブレンドもある。自分を小さくしていくと自分の音楽が作れなくなってしまう。自分が音楽を作れる状態を保つためには、POPミュージックとしては伝わりづらいけど自分にとっては必要という曲は**内的要因**が濃い曲になる。それに対して人に聴いてもらいたいとき、表現はコミュニケーションだと思うので、より人に伝えたいがために**外的要因**が濃いものを作ったりと、バランスを取りながら綱渡りをしている(阿部)



(DD MAP Ookawa wrote)

※「注釈」は青、「本日のメタ」は赤で表示しています。

※1 ジャック・ニコルソン俳優。1937年生まれ。米ニュージャージー州出身。58年のデビュー後、多くの映画作品に出演。75年『カッコーの巣の上で』、97年『恋愛小説家』でアカデミー主演男優賞を受賞。

※2 新宿の末広亭 新宿三丁目にある寄席。落語を中心に、漫才などの色物芸が多数執り行われている。1897年創業。

※3 古今亭志ん駒 落語家。1937年生まれ、埼玉県出身。1963年に五代目古今亭志ん生に入門し、志ん駒を名乗る。落語協会所属にして同協会理事でもある。

【ステージ上で緊張するという事】

緊張しすぎるということはないが、逆に緊張しない時は駄目なステージになる。緊張していないと、集中できなくなる。(古今亭)

→瞬間的に緊張することで能力がグッと高まることもある。緊張しすぎるとパニックになってしまい、ステージが駄目になる。「覚悟」という「緊張感」をイメージトレーニングしてある程度自分を追い込んでからステージに立つと良い。(阿部)

→過去に実験的にすごく酔っ払って舞台上上がったことがあるが、物を壊してしまったりして舞台が終わった後に気持ちが悪かった。緊張した方が、気持ちよく舞台を終わらせて良い。(戌井)

## 【観客の捉え方】

落語の世界は、同業者は正面から見てはいけないという暗黙のルールがある。この世界の上下関係とかの問題だと思うが、失礼の意に値するため、必ず袖から見る。正面から見ると本当にカッコいいが、袖から見ていると困っている様子がわかったりして「生」の様子が伝わってくるので違う。(古今亭)

→音楽の世界でも同業者を袖からみていると焦っている様子がわかるが、(客席で見ていると)ステージ上での出来事として余計なものがそぎ落とされ、強度を増したものとして見えやすい。

(阿部)

→観てるこっちが緊張してしまうパフォーマーもいる(戌井)

→「お前が緊張することで客を緊張させる」と以前人から言われたことがある。それはお金を取っている人間として失格なので、どんなに緊張しても素知らぬ顔をする術は必要だと思う。(阿部)

→逆に「観ているお客さんがいる」というのはどこまで意識しているのか?(大川)

→お客さんとパフォーマーと一緒に場を作るという意味ではかなりお客さんの比重が重い。

TVなどは一方通行だが、舞台は相互的なコミュニケーション。舞台から客席を見て、TVを観ているように興味のなさそうな顔をしているお客さんがいるとそれを見て動じないようにしようと心がけたりする。その時点でかなりの影響力があると思う(阿部)

→すごく自信のあるところで笑ってもらえないと凹む。師匠のような大御所の人でもすごく気にしている。落語では「まくら」というのがあるが、本題の前に少し話すことでお客さんの傾向を見るバロメーターとしている。瞬間に今日の客を「みる」。落語は舞台と客席の照明が一緒だから全員の顔が見えてしまう。お客さんはすごく怖い。(古今亭)

→演劇でもやっぱりすごく緊張するし、怖い。(戌井)



(DD MAP Abe wrote)

## 【場所性と客層】

東京は印象として一方通行がときもある。大阪は客席から客が話しかけてきて、コトバのコミュニケーションがある。東京はお客さんの反応はもっと幅広い。(阿部)

→「寄席」と「それ以外の場所」ですごく違う。寄席は特定の人を目当てにしておらず落語を聴きに来る人や、通りすがりの人が来ているので結構シビア。それ以外の会場だと目当ての人がいる(自分を観に来てくれる)からある程度許されていたり、あたたかい印象がある。(古今亭)

→NYだとジャズ好きがジャズを聴きに行くという文化があるが、日本だと客層が細分化されているため広がりにくい。そのように母体があるというのは羨ましい。演劇でもそういう「演劇好き」という層がいると思うが(阿部)

→僕ら鉄割は「演劇好き」には敬遠される。演劇の世界は劇団が固まって、交流することに固執している傾向がある。そういうのを遠ざけて劇場で芝居をしなかったりした。面白いことをやっている人と一緒に何かする内に、バンドやミュージシャンなどと交流ができた。(戌井)

→ジャズの例のように、ジャズ好きと蘊蓄を言いたい人というのがいてその2タイプは違う。お客さんの理想をいうとジャンルに捕らわれず、「その表現が好き」と言ってくれる人が良い(阿部)

→この間立川談志※4の寄席に行ったが、オペラシティの大きなホールにも関わらず、後ろから殴られるかのようで、すごく客席にいて怖かった。悪い話ばかりして、迫ってくる人間の怖さがある。あれはなんの怖さだろう？あんな人は他にいない。(戌井)

→今の話のように距離感がごちゃ混ぜになっているライブというのは、諸条件やそのパフォーマンスの力によるものだと思うし、やはりお客さんとの相乗効果・相互作用があると思うが、良い客、悪い客はあるか？(大川)

→昔は言い訳にもしたけど、今ではそういう関心なさそうな人に対して、その人の襟首をつかむような、1対1でのコミュニケーションを成立させることができるか、ということに興味がある。(阿部)

→CDでライブを聴く、映像などでライブを観ることは可能だが、そのような記録媒体と「ライブ」の違いは何か？(大川)

→空間の共有。空間を切り取ったものを映像で観たとしても、音の振動や張り詰めた空気は部屋で映像を観ても伝わらない。映像で伝わることはかなりそぎ落とされた状態。やはり生のほうが好き。誰に向けて演奏しているか明確なので、エネルギーが発散しやすい。レコーディングは戸惑ってしまう(阿部)

→ビデオに撮ったものをみても全然面白くない。やはりその場の匂いとか大事。(戌井)

※4 立川談志  
落語家。1936年生まれ。東京都文京区出身。52年に16歳で5代目柳家小さんに入門。63年立川談志を襲名し、現在に至る。長寿番組『笑点』の立ち上げや、国会議員を経験するなど多岐にわたり活躍している。

## 【パフォーマーとしてのウリ】

お客さんは何を期待してライブに来るのか？(大川)

→やっぱり人間。人間の発しているものを観に来ている。他のものがどんどん機械で済ませられる今、ライブだけが目立って「替えの利かない」ものになってきている。もっとという顔。(阿部)

→演劇でも顔と動き。日常のリアルなことを再現しても、伝わらない。逆に過剰にやりすぎることがリアルな表現に達することがある。舞台上で本気で殴る時があるが、本気でやっても何か違う(戌井)

→本気で殴ろうが殴るまいが、お客さんには関係なくて、伝わるためにはデフォルメや過剰さが必要(阿部)

→リアルに伝わることは作品の良し悪しに対してそのまま評価ではないと思うが、落語においての「うまさ」とは？(大川)

→落語などでは「うまい」とは「カッコいい」のこと。具体的には「間」と「しゃべり」(古今亭)

→演劇も同じ。(戌井)

→音楽だと技術は悪ではないが、技術が高まることで失われることもある。表現というものはもともと伝えたいことがあるので、技術が目的になってしまうと伝えたいことが伝わらず、本末転倒になってしまう。単なる技術的なうまさと自分の技術を踏まえて効果的に伝えるられるうまさの2つがある。(阿部)

ふんわりめがらみ？  
「加割」  
「リアル」≠「楽」  
リアルな何か？

(DD MAP Ookawa wrote)

## 【パフォーマーにとっての社会的評価、拠り所】

自分で良かったと思うことはあるが、それに浸ることはない。ただ嬉しいと思いたいからやっている。喜びたい。(戌井)

→ウケたか、ウケないか。これに尽きる。(古今亭)

→演劇の場合は集団なので、みんなで喜びたい。色々な人間が集まっているしみんなでずっと楽しんでいたい。これが持続していけたら良い。(戌井)

→持続は変化でもある。お客さんが度々来てくれてその間に生活などでも色々な変化があるが、そこでまた喜んでもらえるというのは変化があるから。以前はマスに目が向いていたが、そうするとお客さんのことが見え、結果モチベーションの向上に繋がらなかった。音楽を続けるかどうかは、やはりお客さんの反応、1対1のコミュニケーションが要だと思う。(阿部)

## 【本日のメタ】

「過剰」、「リアル」、「内的要因」、「外的要因」

## 【本日のまとめ】

今回のパネリストはジャンルを越えたパフォーマーに集まっていたが、日頃「お客」という立場にいる私は、ステージに立っていない、素の彼らに会えることを楽しみにしていた。ファシリテーター大川の質問のもと、彼らの本音を紐解いていくわけだが、3人は意見を対することなく、始終お互いの考えに共感しているような印象を受けた。「舞台に立てば緊張もする」、「お客さんは怖い」。今回のダイニングデスクでは事前にお客さんにアンケートを書いてもらい、ディスカッション中にその回答を読み上げながらの進行だった。その中で「パフォーマーとは究極のシャイである」という回答があったが、まさに彼らは、パフォーマーになった経緯こそ違えど、シャイで常に周囲を見渡して気を配るような、とても気の良くて真面目な人たちなのだ。客席にリアルを伝えるギミックとして過剰さが生まれたり、お客さんを惹きつけるために「間」「しゃべり」「動作」など五感をフルに使う、日々試行錯誤して我々に投げかけ続けている。

更に彼らの共通点はハード面における技術の向上に対し、危惧の念を抱いていることだ。CDやDVDなどの記録媒体やそれらに関わるメディアは、パフォーマーとしての本質を軽んじてしまう危険性を持っており、それに吞まれてしまえばパフォーマーの生命に関わってくることである。阿部氏が語るように「技術は悪ではない」ものの、技術との付き合い方を上手に踏まえたうえで効果的に利用できること、それが上級のパフォーマーということなのだ。

最後に彼らに「拠り所は何か？」と問うてみたところ、これも一様に自身が「喜びたい」ということが根底にあるとのこと。プロフェッショナルな人々に対して失礼ではあるが、コレを聞いて私は「なんて愛らしい人たちなんだろう！」と関心してしまった。コレは無論、自身の喜びをさしているのであるが、その前後にはライブを共に作り上げるメンバーやお客さんとの「喜びの共有」を意味している。空間共有至上主義。コミュニケーションというコトバばかりが先行して、其の実が蔑ろにされているような現在の社会。彼らはそんな社会の中で、コミュニケーションを最も真摯に捉えている。パフォーマーとはライブを愛してやまない人々である。そんな彼らの人間臭さを共有したくて、我々は今日もライブへ行くのだ。

(土田愛)